モンスターハンター Ｒｅ ＷＲＩＴＥ

モデ吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターハンター　Ｒｅ　ＷＲＩＴＥ

【Ｎコード】
Ｎ５２３５Ｐ

【作者名】
モデ吉

【あらすじ】
昔、ＳＩＢＡ☆翔太郎のペンネームで書いていたモンスターハンター小説のリメイク版です。
もし、よかったら読んでみてください

序章　人竜戦役

　これは、昔々の話……
一匹の竜が街を目指してひたすら真っすぐ進んでいた。
竜は山のように大きく、その姿は、まるで大陸が歩いているようだった。
当然、街も、その様子をただ見ているはずはなく、ありったけの兵隊とこれまたありったけのモンスター狩猟者、つまりハンターを傭兵としてかき集めて迎え撃つ構えをとった。
しかし……
「化け物か……兵士の犠牲だけで三百だと」
　誰かが呟いた……
巨大な竜はまるで、動く大陸のようだ。
一歩一歩足を強く踏み締め、逆らう者には火を吹き尻尾を鞭のようにしならせ、まるで蝿を潰すかの如くたたき落としていく……
まるで死神の行進だ。
「シンシア隊、壊滅。ジスト隊、ディーク隊は三名ずつ損傷」
　先程から医療班の耳を刺すのは味方の壊滅報告のみ……
誰もが恐怖に怯え、気が変になりそうになっていた時だ。
一筋の声が響き渡った。
「諦めるな、諦めなければ大丈夫さ！」
「……」
　男勝りだが、確かにそれは女の声だ。その後から響き渡ったボウガンの轟音とともに熱血な言葉が皆の耳に一筋の勇気を運ぶ。
この大傭兵部隊で五本の指の中に入る実力を持つと言われているハンター、ロイとイロハである。
　蒼いギザミ装備に身を包んだ男勝りな言動が目立つ女性、イロハ……
対照的に赤いザザミ装備を着こなす寡黙なハンター、ロイ……

彼らは、街を守るための傭兵として、地方の小さな集落、カチュア村から派遣された、有数の腕利きハンターであった。
「ジーク、ソフィアあなたたちは援護を」
「了解！」
二人にはそれぞれ、一人ずつ弟子がいた。
イロハの弟子、ジーク……　年の頃はまだ十五～六といったところで、白くてぶよぶよな飛竜、フルフルの素材から作られた防具フルフルSに身を包み、同モンスター素材の大剣を愛用していた。
「姉貴、どこを狙えばいい？」
「わからない、普通なら頭のはずなんだが」
姉貴と呼ばれた女性はロイの弟子、ソフィアである。
装備は同飛竜フルフルの亜種と呼ばれる赤色の固体からの素材を活用した物で、武器は扱い易い弓を背中にしょっていた。「若い子はいいね、元気があって」
イロハは磨石を取り出して愛刀を磨く。
「俺達も……まだまだ若い……」
フフフと口に含み笑いを浮かべながら、ロイは新しい弾をボウガンに込める。
「そうね、まだ三十前だもんね」
普段無口な夫のつぶやきをクスクスと笑いながらイロハは刀を背中の鞘にしまう。
「相変わらず、磨ぐの速いな」
「手は抜いていないわ……
あなたこそ、しっかり私を守ってね」
「ああ！　絶対にお前を守る。アンのためにも」
言い忘れていたが、実はこの二人は夫婦であり、五歳になったばかりの娘もいる……
ハンター稼業が長くほとんど構ってやることも出来ず、いつも寂しい思いをさせていた。「アン、ちゃんと寝る前におトイレ行ったかしら」

こんな時に娘のささやかな失敗を心配している場合ではないのかもしれない……

いや、こんな時だからするのだろう……

早く帰って泣いている娘を思い切り抱きしめてやりたい……

いつも、頭の中にはそれしかない彼女だから、これまでも生き抜いてこれたのだろう。

人は何かを守ろうとするとき、その真価を発揮する……

「イロハ、お前はアンを甘やかし過ぎる、だから未だに毎朝シーツを汚す」

ロイは逆に現実的だ……

ハンターという仕事は、本来は家族など持ってはいけない職業であるからだ。生に未練が生まれ、上手く戦えず帰らぬ人になるハンターは決して少なくはない。自分は娘のために戦って死ぬことにはなんら後悔はない……

だが、残された娘がいつまでも自分達から離れられなかったらどうする……

自分もイロハのように娘を抱きしめたい……

だが、それをしないことも時には優しさである。

甘えたい盛りの娘を悲しませるのは心が痛む……　しかし、自分がこんな職業についているからこそ、娘には早く自立して欲しい……

親のエゴと知りながらも、彼には彼なりの父心があった。

「あなたこそ、たまには甘えさせてあげなさい……

あなたの背中はそのためにあるんだから」

「お前も、時には厳しくな……　子供にとって一番身近で安心できる存在なのだから……」

そう言って、ロイはそっとイロハの唇を奪った。

周りで見ていた兵士に、二人を見てはやしたてたりするような野暮な者はいない……

ただ、皆、自分の護るべきモノを再確認した。

不思議だ……

心のなかに何か熱いものがジーンと広がっていく……
もう、ただ大きいだけの竜なんて全く怖くない……
　ピリピリしていた神経も少しだが和らぎ、皆諦めずに竜を目指して攻撃を続ける。
「ソフィア、射撃隊の指揮を、ジークはイロハと切り込め。射撃隊、いいか、生傷一つでいい、一人でも多くの仲間の援護を」
「了解」
　だんだんロイは饒舌になってきた。　普段喋らない彼だけに、一度喋り出すと止まらなくなる。　皆の精神力はすでに限界を超えている。しかし、それでもやらねばならないのだ。恋人を……愛する家族を守るために。
「砲撃隊、滅竜弾装填……撃てーっ！」
　竜に有効性を持つ、竜殺しの実をふんだんに使った滅竜弾を巨大な竜の足を目掛けて放つ。
しかし、例え有効であっても、アリと像の以上の体格差……
火力、威力共に足りなさ過ぎるのか、竜は全く動じない……
まるで、山に向かって石を投げているようだ。
「化け物か……」　ロイは思わず呟いた。
普通ならこれだけの数の滅竜弾を撃てばどんな飛竜でも大抵棺桶入りなのに……
これには流石のロイも絶望した……
自分にはもう打つ手がない……
諦めるなと周りに言い放って来たが、その余裕すら……ない
「ロイ、アンの事、頼むよ……」
　亭主の落胆しきった顔を見て、イロハは言った。
「イロハ、何をするつもりだ」
　イロハはギザミ装備の中から小さい丸薬を十粒ほど取り出す。
「イロハ……それは！！」
　ロイにはイロハが何をやろうとしているのかがわかった。そして、自分がそれを止めないといけないことも……

「わかってる、でも、誰かがやらなきゃいけない事なの……」
「やめ……」「いいから……」
ロイの制止の手を払い、イロハは丸薬を全て口に含み、狂走薬でそれらを流し込んだ。
「イロハさん！」
「無茶だ……、やめろ師匠」
皆が彼女の愚行を止めようとした時、もうイロハは薬を飲みきっていた。
「アンをお願い……強い女の子に育ててね」
そう言った瞬間、あらゆる強化薬を乱用した彼女の体からは滝のように汗を吹き出し、目は血のように赤く染まる。
「最終奥義……蒼い疾風（ブルースラッシュ）」
そう叫ぶと、イロハは一瞬、皆の前から消えた……いや消えてなどいない……
人間の目で追う事など不可能なスピードで移動しただけなのだ。不死鳥薬……
薬学知識のあるイロハが調合したハンター世界最強の薬……
一錠飲んだだけで全身の筋繊維が異常に興奮し、脳の理性を司る部分を破壊する……
そして、自らの命とひきかえに、肉体を最強の状態以上に持って行く。
マウスをつかった実験で、投薬したマウスは同族であろうが猫（アイルー）であろうが命切れるまで戦い続ける殺戮マシーンへと変貌していった。
一筋の青い閃光となったイロハは、まるで鳥竜のような身軽さ、牙獣の如き力強さ、霊獣キリンの硬さを身につけ、竜の鱗を粉砕していく。
「うぉらあああああああああああ」
獅子のように咆哮するイロハに、理性などひとかけらも残されていない……
あるのは果てなき血への渇望と、敵を倒す事への執念のみであった。

見ている者はただただ恐ろしかった。褐色がかった彼女の美しい肌はみるみるうちにグロテスクに変色し、燃え盛る炎の如く真っ赤な彼女の端麗な紙は雪の如く白く染まり、その炎を失う……
そこには恐怖という言葉のみで形容するには軽すぎる、真の怪物が誕生したのだ……
「右足の鱗が破壊され傷口が出来た、毒撃隊、麻痺撃隊、撃てー」
その恐怖を打ち消さんと、ロイの太い声が隊内でこだまする。
その声は少しぐもっていた……
「ロイさん……」
「何も言うな、アイツはアイツの仕事をしているんだ。何人もの、何十人ものアンを守るために
決してカッコイイとは言えない姿で……
決して美しいとは言えない戦い方で……」
「はい……」
ソフィアは遊撃隊を指揮し、イロハが作った新たな傷に毒や麻痺瓶を装着した弓で狙い撃つ。
「姉貴、前に出るな」
ジークも残された近接武器を使う者達で小隊を編成し、イロハの作った傷を大剣でどんどん広げていく。
よく見るとその目には涙さえ浮かんでいた。
「イロハさん……見てらんないよ……」
イロハの全身の毛穴という毛穴から彼女の髪の毛の色と同じ赤い毛が生え、それが一瞬にして真っ白に染まっていく。全身の機能をフルに活用すべく薬を飲みまくった彼女への大きすぎる副作用であった。
「ぎゃあああああああああ」
ある意味、今の彼女は神をも越える存在とも言えるかもしれない。しかし、激しい動きや普段使わない神経までもフル活用しているイロハは消耗が激しく、とうとう膝をついてしまった。
「もう、無理だ、中和剤を……」

「もう遅いわ……
多分良くても一生廃人って感じかな……」
「イロハ……
妻の最期を看取ろうと、ロイは優しく手を握る。
「ロイ、あなたにはまだやることが山のようにあるわ……だから戦って、私や死んでいった兵士のために……」「あと、ジーク。アンには私の刀を渡して。別にアンがハンターにならなくてもいいから。私の生きた証を彼女に渡して……ね」
愛弟子ジークに自分の愛刀を預け、遺言を残す。
「バリスタ隊、撃てぇー」
街のほうから大声の後に大砲の爆撃音が響いた
「ぞ……増援！！」
バリスタとは街に装備されている対巨竜用の武装の総称である。先程、滅竜弾に使われていた竜殺しの実を大量に仕込んだ大砲や、巨竜の予想到達点に仕掛けられた針地獄……
まさに、人類の英知の結晶である。
「勝てる、勝てるぞ俺ら！」
ジークは呟いた。
再び研石で愛刀を研ぎすまし、じっと竜を見る。
イロハの剣技や、名もなき戦士達の執念でその体は無数の傷を負い、ボロボロだ……
恐れるものなど、なにもない。
「行くぜ、姉貴！」
「ええ、イロハさんの弔い合戦よ」
嵐のような槍、砲弾、弓の雨、手柄を立てんと意気がる若い兵士達最終兵器の針地獄を使うことなくこの戦は終局を迎えた。
「グルァァァァァァァァァァァ」
この断末魔の叫びで大地は揺れた……
まるで、彼がこの地を司った神のように……
こうして実に十日以上に渡って繰り広げられた人竜戦役は幕を閉じ

た。
兵士達はこの勝利に歓喜し、互いの健闘を讃えあった。
　しかし……
「そんな……ゴホッ……お……しないの。あーあ……おばあさんになっちゃった……」　失った物も多すぎた。
大陸のような大きさの竜は移動するときに様々な物を運んできた。
火竜の卵や凶暴な肉食鳥竜……
さらには疫病を運ぶ毒虫……
それらの一部が街に入り込み、街をパニックに陥れた。
そしてここにも自分の大切な物を失った男が一人……
「イロハ……」
　イロハの顔は薬の副作用で髪は完全に抜け落ち、歯は折れ、目は完全に閉じてしまっていた。
　さらに、いくつか脳の神経にもダメージを受けたのだろうか、老廃物の臭いが鼻を刺す。
戦女神（ヴァルキューレ）の如く戦いきったイロハの最期だ……
それは、決して立派な物ではない。「ソフ……ィア、ジーク……おねが……いア……を、このた……かいで……やをなくし……た……す……てのこど」　もはや喋る力など残されていない……
だが、最期まで自分の娘や同年代の子供を気遣う優しい女性だった、イロハは。
彼女は戦女神（ヴァルキューレ）になれなかった。
なぜなら彼女は戦に生きる意味を見失わなかったからだ。
今のイロハを見て決して美しいとは言えない……
美しい赤い髪も、妖艶な香りを漂わせる唇も、彼女には残らなかった。
だが、彼女は母として、女として、いや人として生まれ持った優しさを忘れずにこの世を去った。それだけが不幸中の幸いだったのかもしれない……

ソフィアはうんうんといった感じに首を振った。
そして、涙と共に倒れてしまった。
「あなた……
まだ、結婚五年目であった。
しかし、強い絆で結ばれた二人にそれ以上の言葉は必要なかった。
ロイはイロハを抱き、そっと皆の元を離れた。
十日以上に渡った人と竜の戦い……　いや、戦争は人側の勝利に終わった。
しかし、これは勝利とは言えない戦いだった。
ぐちゃぐちゃに潰された街の明日の事など考える余裕もなく、兵士達は眠る……
ただ今は眠るしか出来ないからだ……

第一章　10　YEARS　AFTER（前書き）

　私のママは十年前、竜によって殺された……
ハンターとして立派な最期だと聞いている……
当時の私には死という物がどういう物かわからなかった……
ただ、自分の愛しいものを一つ失った……
自分の最大の理解者を失った……
それだけだった……
その日から私はしばらく声が出なくなった……
何を食べても味がしなくなった……
ヒステリーをおこして周りに迷惑をかけた……
怖くて怖くて仕方がなかった。
そんな時、こう言ってくれた人がいた。
「……」
いや、その言葉は思い出せない……
だけど、私はそれをきいてハンターになろうと決めた。
私からママを奪ったハンターに……

第一章　10 YEARS AFTER

ここは山奥の小さな集落、カチュア村。
グォグォグォグォギャーオと、けたたましい朝一番のイャンクックの鳴き声で動き出す小さな村。
そんな村の小さな家。
ここでも、一人の女の子が目を覚ます。
小柄なほうで、母親譲りの赤い髪の毛を短く切り、丸顔とくりくりとした目が愛らしい。
いつもなら、寒い寒いと言って朝起きることもできず、布団の中で着替えをするというずぼらなところがあるが、今日はそれをしなかった。
えいっ、と勢いをつけて起き上がり、寒がりのため迅速に、流行遅れの茶色のセーターを被り、その上から、フカフカのマフモフコートを羽織る。
「おはよう、ママ」
少女は眠い目をこすり、軽く伸びをしながら母親の写真立てに話掛ける。
少女の名前はアン、彼女の母はハンターであったが、彼女がまだ5歳だった頃に村を襲った巨大な龍によって殺されてしまったと聞いている。
そして、15歳になった今日、彼女もハンターになった。
理由は、誰にも話さない……
母親が死んだのは彼女が五歳の時だったし、思い出もそんなにあったわけではない。
しかし、自分は覚えていないが、母親が死んだ時、自分は大変な事になってしまっていたらしい。
ただ、時間が経てばいないのが当たり前になり、感傷にもひたらなくなった。

さらに、母親を殺した竜は彼女の仲間にとっくの昔に狩りとられていた。
だから、敵討ちという理由も彼女にはないはずだ。
だが、彼女はハンターになった。
　当然、彼女の父や周りの人間は彼女がハンターになることに猛反対したし、頭がいい彼女にはもっと進学や違う職業という選択肢もあった……
しかし、彼女はそれらを選ばなかった。
理由は彼女しか知らない……
「アンちゃん、ごはんできたニャー」
　着替えが終わったころ、となりの台所から元気のよい声が響く、キッチンアイルーのサンバだ。
サンバは雑種であり、灰色と黒のしましまな毛並み特徴だ。
キッチンアイルーということで、少し大きめのコック帽をかぶり、エプロンをかけている。アンの父はハンターでアンの母が死んだ後も、仕事が忙しく、アンにあまり構ってはやれなかった……
サンバはそんな父のかわりにアンをここまで立派に男手ならぬ、猫の手一つで育て上げたのだ。
「サンバ、いつもありがとう」
　グツグツと心地のよい音がお鍋から響く、コーンスープ……
少し形は悪いが、豪勢に盛りつけられたハムや卵のサンドイッチ……
においをかいだだけでアンは思わず唾を飲み込んだ。今日の朝ごはんはアンのハンター記念日ということでサンバが気合いを入れて作ったのであろう。　心なしか、アンの喉がなった時のサンバの顔はとても誇らしげであった。
「どういたしましてニャ、それにしても、とうとうこの日が来たのだニャ
ボクは嬉しくて涙が止まらないニャ
その勇ましい姿、イロハさんにも見せてやりたかったニャ」
　サンバのつぶらな瞳から大粒の涙がぽろぽろ流れ出す。

「もぉ～サンバったら大袈裟なんだから」
照れ臭そうに頬をかき、サンドイッチを頬張りながら少し俯く……
アンは先程から背中に背負った太刀がすごく気になっている。
ハンター訓練所時代の教官から卒業祝いに貰った太刀、鉄刀だ。
この刀は、教官が武器屋の親父と共に、打ったものであり、少し粗削りなところもあるが、切れ味はおりがみつきだ。
「でも、ボクとしてはあんまりアンちゃんにハンターになってほしいとは思わないニャ」
アンの姿を見て嬉しそうなサンバであったがどこか、悲しそうにつぶらな目がアンを見つめる。
「サンバまで……」
「でも、やるって決めたからには頑張ってほしいニャ」
「うん」
応援してくれる人（正しくは猫である）がいる……
うれしさと恥ずかしさがいりまじった気持ちを隠すために、アンはサンドイッチをひたすら貪った。
サンバはうんうんとそれをただ眺めていた。
「ありがとう、行ってきま～す」
そして、食事を終えたアンはサンバにお礼をすませると、玄関のドアを力強く開け放し、外に出て大きくのびをした。
風は冷たく、薄曇りの暗い朝だ……
しかし、今、アンの胸の中に入ってきた空気はいつもとちがう新鮮なもののような気がした。
そして、力を与えてくれたサンバの食事。
今なら牙獣でも竜でもどんとこいといった具合だ。
いつもと同じ道なのにどこか足どりは軽く、鼻歌まじりで村外れの集会所に向かった。
集会所はアンの家からは歩いて五分くらいの場所にあり、半分酒場の様な所である。
酒を飲み交わす者、作戦会議を行うグループ、酔っ払って飲み食い

した物全てを吐き出す者などなど。
「邪魔だ」
人相の悪い荒くれ風の男はアンにゴンと肩をぶつける。
「す……すみません」
どうみてもぶつかってきたのは向こうであるが、その勢いに押されたアンは反射的に謝ってしまった。

「お嬢ちゃん×××って知ってるのー」
酒に酔った中年ハンターが大声でアンに聞く。
「えっ、えっと、新手のモンスターですか？」
よっぱらいの扱いに慣れていないアンは、ほうっておけばいいくだらない中傷に真面目に反応してしまう。
「まあ、モンスターだなー！　ズボンの中で暴れちまって大変だからお姉ちゃん、お口で狩ってくれや……やさしくな！」
アンも年頃の少女だ、単語の意味はわからないがこの下品な男を見たら先程の単語の意味くらい、なんとなくだが理解できる。
「え……えっと、失礼します」
「へっへっへ……発情期のコンガには気をつけな」
と、アンをからかうと中年ハンターは仲間達と飲み直した。
やはり、酒場独特の空気の中、まだ子供のアンは必然と浮いてしまっていた。
「えっと、クエストを受けるんだよね」
勝手も分からずにうろうろとしていると聞き慣れた声が響いた。
「よう、アンではないか、受けるクエストは決まったのかな」
「き……教官……どうして……」
教官のジーク、アンに狩りのテクニックを全て教えたアンの師匠である。
「私もクエストを受けにな、ドスギアノスの狩猟なのだが一緒にどうだ」
ハハハと笑い飛ばすジークを見てアンは少しホッと胸をなでお

ろす。
クエストなどと言ってはいるが、本当は弟子であり、妹分のアンが心配で心配でいても立ってもいられなかったのだ。
　アンはジークの実力はよく知っているし、ジーク以上に力強い仲間はいない。
しかし
「ありがとうございます、教官、でも、ここで来てもらったら私はいつまでたっても半人前です。
だから、いつか私が教官と一緒に狩りをしても恥ずかしくないレベルになったらご同行お願いします」
　そう言って、頭を下げて、さっと、受付の列に列んでいった。
「うむ、あいつも大人になったということだ」
　弟子の成長がうれしかった思いと少し寂しい思いを隠そうと、腕を組み、首を軽く二回振った。

　狩猟の依頼は掲示板に張り出される。
背の低いアンは、ピョンピョン跳ねながら掲示板を眺めようとする。
「さて、どのクエストにしようかな」
　しかし、張り出された掲示板を見ても名前も知らないモンスターばかりで、何を選んだらいいかわからない。それもそのはず、今の時期はアンと同じようなかけだしハンターが沢山デビューする時期である。
当然、アンでも名前を知ってるようなマイナーモンスターの狩猟依頼は必然と埋まってしまうのだ。
　しばらく考えていると服の裾を引っ張られていることに気がついた。
見るとそこには小さな老婆が顔をしかめながらアンを見ている。
「ちょいちょい若いの、頼まれて欲しいことがあるんじゃが」
「えっ、私？」
　振り向いたアンに老婆はニコリとうなずく。

「実はのう、来週に孫が遊びに来るのじゃが、料理に使うポポノタンの値段が上がってしまってなぁ……
すまないが、取って来て欲しいんじゃ」
老婆は歯が殆ど残っていない口をモゴモゴさせながらアンに話し掛ける。
「えっと……ポポって、あの大きな牙を持ってる大きい動物ですよね？」
ポポとはマンモス型のモンスターで、竜クラスの大きさを持つ固体も存在はするが、基本的に最弱に分類されるモンスターであり、初めて受けるクエストにしては簡単過ぎる。
できれば避けたい話だ……
「どうも最近ポポの値段が上がってねぇババアの財布じゃ手が届かないんじゃ、孫と会うのも一年ぶりじゃし、いい物を食わせてやりたいんじゃ」
老婆はしわにまみれた顔を上下に降り何度も何度も頼み込む。
「わかりました……取ってきます」
「本当かえ……ありがとう、ありがとう」
しわしわになった手で何度も何度もアンの手を握った。
アンの母は困った人を放っておくようなハンターじゃなかったと聞かされている……
ならば、自分も同じように、なりたい……
そう思った、アンは照れながらもしっかりとその手を握り返した。
契約成立である。

ポポの生息する山は年中真っ白な雪のベールで被われた氷山だ。
アンの村から徒歩三十分くらいで行ける距離にある、その山はアンのように比較的初心者のハンターが腕を磨いたり、またベテランのハンターが腕慣らしに来る場所である。
出てくるモンスターのレベルは低いが、時に飛龍のような恐ろしい

モンスターが来ることもあるので、要注意。　険しい山道をアンはマフモフコートに身を包み、山をどんどんと上ってゆく。
「……」
口が開かないほど寒い……　アンは震える手先でコートの中にしまってあるホットドリンクに手を出す。
「エヘッ、エホッ……　辛いよぉ」
辛さから温もりなど感じる余裕などなく、アンは誤ってビンを落としてしまった。
「あー、もったいなーい……　どうしてココアとか甘いものにしてくれないのかなぁ……」
アンの主張は別に間違っているわけではない。
チョコレートやコーヒーなどに含まれるカフェインという物質には緊張を和らげたり集中力をあげる作用がある……
向いていない飲料でないことだけは確かである。
ただし、熱を保温したまま飲料を持ち運べる魔法瓶のような技術はない……
ホットドリンクで体が温まるのは、ビンや中身自体が熱いからなのではなく、辛さと熱を感じる場所が近いという性質を生かしたからである。
例え氷のように冷たい水でも、とうがらしのスパイスは体を芯からあたためてくれる。
あと、余談だが、カフェイン飲料には強い利尿作用というハンターには向かないネックな点もあるのだ。
体を温めることを諦めたアンはとりあえず頂を目指すことにした。
「えっとここはエリア6だから……」
山頂までもう少しだと、寒さに震える自分を励ます。
「ムォー」
小さいながらも、近所の牧場で聞いたことがある声が聞こえた。
「……目標（ポポ）発見……」
二、三頭の小さな群れ、いや、世帯のようにも見える……

一頭は子供で二頭はその両親といったところか……
ハンターをやるからにはくだらない感傷は捨てろと教官に口をすっぱくして言われてはいたが頭に浮かんでしまった物は仕方がない。
「……」
　アンはコートの中から音爆弾を取り出し、投げた。
キーンと耳が潰れそうになりそうな音から耳をふさぎ、ながらポポ達の死角に回り込む。
ポポは寒さから身を守るために全身毛で覆われている、そのため、視界が他の哺乳類に比べると狭い、ただし、外敵を察知する耳は異常に発達している。
そのため、アンは先に音爆弾で敵の耳を奪う作戦に出た。
「……」
　鉄刀を抜き、急所目掛けてグサリと突きをいれる……
アンとポポの体格差を考えれば連撃などあってはならない……
それに、アンはまだハンターに成り切れてもいない少女だ……
躊躇していたら、今度は彼女が獲物に狩られてしまう……
草食動物は少ない手数で狩れ……　非情ではあるが、真理をついた言葉なのかもしれない。
そして、刀をすぐに抜き、二頭めのポポにも手をかけた。
アンはまだ一頭も殺してはいない……
ポポの急所の傷口を凍らせ、凍傷をおこさるのが目的である。
一撃離脱で弱るのを待つ……
卑怯にも見えなくはないが、これはゲームではない……
無傷で生き残るためには正義も悪も定跡もイカサマも存在しない……
そんな世界であった。
　一頭の子供のポポは逃げ出した。
これも、種の保存という行為の前では当然の話だ。
アンは、そのポポを追いかけず、ただ、
「ゴメンなさい……」
　と、だけつぶやいた。

「ゴメンなさい……」
　またそう言うと、弱り切った大型のポポの脳天に、鉄刀を突き刺す……
獣の肉独特の臭みが鼻を刺し、むせる……
料理をするときに食材を切るような軽い感じとは全然ちがう……
手の平に伝わってくるこの感じ……
まさに自分は命を奪っているのだ……
無論、今日が初めてというわけではない……
だが、慣れない……
　いや平気でそれが出来るようになったら自分は人でなくなる気がした……
「……」
　アンは無言で採取用のナイフでポポから舌を切りとる……
「さて、かえろうか……」
　ボソッっとつぶやいた時だった。
ギャオオオオオオオ
大地を引き裂くような大きな鳴き声、いや咆哮と言うべきだろうか……とにかく大きな声がアンの耳を刺す。
思わず耳を塞いだが、まだ耳がジンジンとしている。
アンは物影に隠れて、声のしたほうを覗く。
　全身を覆う金色の鱗、羽の役割も合わせ持ち、フィールドを俊敏に動けるよう発達した両足、ありとあらゆる生物の頂点に君臨する竜の王者……
その名もティガレックス。
「あれは……飛竜」
　ティガレックスは前脚から伸びる鋭い爪でポポを掴み、グチョ、っと鈍い音を響かせる。王者にふさわしく、獰猛に、肉をかみ砕く姿からは、恐怖以外の感情が生まれることはありえない……
（ティガレックス……初めて見た……）
　逃げなければ殺される……

そう感じた瞬間、無意識のうちにアンの大腿を生暖かい物が流れた。
（動け、動け私の体、動いて）
そう心の中で何度も叫んだ。　だが、アンはティガレックスに魅入られたが如く一歩も動けない……
完全な金縛りだ。
ポポを食べ終えたティガレックスは小さな鼻をクンクンと動かす、彼の好きな血のにおいがプンプンしているのだ。
アンは気づいていない、自分がティガレックスに狙われていることを……
いや、仮に気づいたとしても、今の彼女には動く術がない。岩影にどこか違和感を感じたティガレックスはアンの隠れている岩を目掛けて岩を投げる。
発達した前脚から投げられる力は野球選手何人分とか、俗な統計で表せる物ではない。
アンを隠していた岩はドンと鈍い音を立てて破壊され、アンはその衝撃で吹き飛ばされる。
「痛っ！」
壁に体を打ち付け、全身に痛みが蘇る。
その痛みが、アンに自ら置かれている状況、取るべき手段を思い出させた。
「そ……そうだ、逃げないと！」
体を動かそうと全身に力をいれる。しかし、体中駆け巡る痛みがアンに逃避を許してはくれない。
「う……動けない」
右足を見るとドス黒く腫れている。
「ギャオーーーーー」
「ひいっ！
それは条件反射だった。鋭く威嚇するティガレックス目掛けアンはポケットに入っていた、ホットドリンクのビンを投げつけ、中の液体がティガレックスの顔面を捕らえた。

「グルギャアーオ！」
刺激物が目に入ったティガレックスは自らの顔を雪の中に突っ込み、激痛を抑えようとする。
「今のうちに……」
応急薬を飲み、痛みを少しだけ和らげると、アンは片足を引きずりながらティガレックスの視界から消えた。
ティガレックスは不思議そうにあたりを見回したが、特に何を考えるわけでもなく、先ほどのポポの元へと戻って行った。
ここは、天然の洞窟、ハンターが主に体制の立て直しのための小休止に利用する。
大きな横穴を白い布で隠しているだけなのだが、これが意外にも見つからない……
「確かこのあたりに……あった！」
マッチでランプに火をともし一息つく……
なんのへんてつもない蝋燭だが、今のアンにはアロマキャンドルよりも心の傷を癒してくれた。
「ん……何か書いてある」
こういう場所に落書きはつきもので、下賤な物が多くてアンは思わず赤面したが、アンが一番恥ずかしかったのはこの落書きだった。
”おい、しょんべんたれ！お前のパンツはコンガよか臭せぇぞ！“
無論、アンに直接宛てたわけはなく、よくある、新人ハンターをからかった、くだらない嘲笑である。しかし、思い当たる節があるアンは、つい、真に受けてしまい、思わず下を向く。
そういえばさっきから足元が冷たい……
「着替えあるかな……」
予備の装備は安価なマフモフコートが多めに揃えてある。
しかし、下着は……
あることにはあった、男性用のブリーフが……
見たところ新品ではある。しかし……
（なんかこれはくの嫌だなぁ……）

思わず顔を真っ赤にして目をそらす。
アンはまだ十五歳……
花も恥じらう乙女である……
そんな思春期真っ只中の少女にそんなものをはけというほうが無理な話である。
「ええぃ、はいてやる」
ホットドリンクを一気飲みし、ブーツをぬぎ、マフモフレギンスと黄色い下着を一気に脱いだ。
やはり、命には変えられない……
まだためらいはあったが、お尻が少し冷たかったため、男物を思い切ってはいてしまった。
思ったよりも違和感はない……
「あれ？どうして前が開いてるんだろう……
ぷぷっ」
少し下な想像をし、自ら笑い飛ばす。
緊張が少しとけたか、はたまた体が少しあったまったからか……
自分でもよくわからなかった。
「たしか、モドリ玉か、緊急用ののろしがあったはず……」
自分の依頼にはティガレックス討伐は含まれてはいない。
今、この状態で帰ったとしてもアンを責める者などいるはずがない。
むしろ、ティガレックスと対峙して生還を果たしたということは彼女の武勇伝になる……
決して損な話ではない。
だが……
「ない、ないよぉ……　モドリ玉も、緊急用のろしも……」
アンの体を再び震えが襲う。
先程も言及したが、今は新人ハンターが多い時期である、アンのように手に負えないモンスターと遭遇してしまうハンターは決して少なくはないのだ。
箱の中に入っているのは、壊れかけたライトボウガンとそれ専用の

弾、弓と強襲ビンと矢が数本。双剣に大量の小さなタルと大タル爆弾、ホットドリンクの材料のための大量のとうがらしとにが虫……自分の持ち物は研石に少数の応急薬や携帯食料と地図、それに先程酒場の臭いが嫌いで買った消臭玉のみ……付け加えるなら脱いだばかりの下着やマフモフコート……並べてはみたが、かなり物足りない……

（使えるものはないかな……）

「そういえばポポのお肉があったっけ……　あと、包帯……あっ、これ打ち上げタル爆弾だ……」

しかし、探し回ってみるといろいろなものが見つかる見つかる……あとは、昔見た、ティガレックスの文献を参考に考えをまとめる。

「よし……あとは……　もう、もらさないように……」

気合いの入れ直しのために洞窟の隅で放尿する。

しゃがみながら、肌が雪に触れるのを嫌がったか、中腰のような体勢だ。尻を冷たい風が優しく撫で、体温で蒸発させられた雪が湯気になって自分を覆う。

背徳感と、爽快感が入り混じったなんとも言えない気分だった……

「うー……　さむさむさむーい」

アンは軽く腰を振って、ズボンを上げる。

そして、表情を少し固くする。気合いは入った……

人にはあまり言いたくない気合いの入れ方だ。　しかし、自分の弱い心が小便と共に流れていったのは間違いない。

「負けない……絶対に……」

それから数十分、アンはガチャガチャといろいろな物を組み合わせて装備を整えた。

（逃げ切る……絶対に……）

パンと右手の拳を左手で鳴らし、準備を済ませた。

そのころ、ティガレックスは、まだ、アンをキョロキョロと探していた。
「グルゥ……」
ふと、彼の鼻は強烈な死臭やアンモニア臭を捕らえた……
獲物……それも先程の人間の臭いがする……
見れば、そこには白い獣の革に身を包んだ人間の姿が！
姿を確認すると、ティガレックスは獲物目掛けて足を進める。
彼は動くもの、血の臭いが強い物に反応する。まるでおもちゃのようだ。
「グルオァー」
獲物目掛けてティガレックスは走る……
しかし、なかなか追いつけない、それどころかどんどんティガレックスとの差は開くばかりだ。
まるで、鉄の心臓を持っているかのごときスタミナとスピード……
ティガレックスは”人間“　という生物に対する認識を少し改めた。
“速いスピードで駆け抜ける固体も存在する……“と
「グルアーーー！」
大きな岩を掴み、獲物目掛けて投げる。しかし、獲物とピントが合わず、当たらない。速い、速過ぎる……
一抹の苛立ちを覚えたティガレックスは怒り狂ったかのように走った。
単純な生き物なだけあって彼の怒りは脳をすぐに刺激し一秒もたたないうちに全身を駆け巡った……
“コイツ、ムカつく”
そのレベルでしかない単細胞な考えが、殺しても、食ってもなんの足しにもならない小さな獲物を追いつづける原動力になったのだ。
「ギャオー」
悔しそうに雄叫びをあげるティガレックスを尻目に獲物は減速を始める。
やはり、体力的にも限界であろう……

バタリと倒れ込んだ、獲物をティガレックスは非常にも、そのするどい爪で引き裂く。
……いや、引き裂いたつもりだった。
切れたのは服だけだ。しかし、獲物は足を滑らせたのか、前に屈み込んでしまった。
「ギャーオ」
自分の大好きな血の臭いをプンプンとさせている獲物に最後の威嚇をかける。
ティガレックスは、特に血の臭いが強い獲物の腹をするどい爪で突き刺した。
何故だ！
肉独特の感触がない……
獲物を突き刺したというよりかは打ち砕いたといった感じだ。
しかし、そのような不快感を感じる前に、バーーーンと爆音がティガレックスの耳を襲い、先程受けた赤い液体のような強烈な辛みと鼻を潰しそうな臭いの粉が宙を舞う……
「ギャウアー」
液体とは違い粉である、細かい粒子が目や鼻から入り、思わず呼吸困難を起こしそうになるほど苦しい。
……これは、アンの作戦である。
アンは、ライトボウガンを軸に、樽で使って体を作り、腹の部分にとうがらしを沢山詰めたカカシにマフモフコートを着せて、それを打ち上げタル爆弾を横向きに置き、前から引っ張らせたのだ。
カカシ作りで注意したのは、おもに臭いである。
ポポの生肉の血をぬりたくり、自らの尿をしっかりと染み込ませた。
そのおかげで、ティガレックスはまんまと騙されてくれた。
その間に、アンは他の逃げ道から逃げる……我ながら名案だった。
しかし、
「ハァハァ……ハァハァ
つぅ……痛い、痛い」

アンはかなり負傷している。特に、先程打ち付けた右足はどす黒く腫れ上がり、痛む……
どっちみち下山まではもたないだろう。
「帰る……絶対に帰ってみせる……」
頼れるのは……己の精神力のみ……
昔、教官のジークに言われた事が頭を回っている。
あれは、ハンター終了試験に挑む前だった。
「いいか、ハンターには沢山の武器がある……
数だけでは書ききれないほどあるが、お前達の持っているいかなる武器よりも強いのは、お前達の命……命だ。
そして、いかなる時もお前達を守ってくれる最強の盾……
それは頭脳だ……
命があるかぎりハンターは終わりじゃない、どんなことをしてでも生き残れ」「はい……教官、私は絶対あきらめない」
双剣一組、弓と矢が十本に鉄刀……
体中の武装が重い、やはり、持ち込みすぎたか……
「少し何かを捨てようか……でも……」
武器を持つ者の心理……
これさえあれば勝てるという心理的余裕……
そして、それと相反するように生まれる、これを離せば死ぬといった不安……
アンにとってティガレックスと遭遇した恐怖を拭うには、この三倍の武装でも少な過ぎるというのだ。
「どれを捨てようか……弓……ダメ、飛び道具は作戦の幅が狭くなる。
双剣……これは私の鉄刀よりも切れる……鉄刀は絶対に嫌！恐い、恐いよ……」
取捨選択が出来ない……
どれが必要で、必要無いものかということが……　わからない、わからないのだ。

足が痛むし、眠気も襲ってきた……
　いっそ寝てしまえば楽かもしれない……
アンの頭は生きることを諦めるために動いている……
何故？……、さっき生きようと誓ったばかりなのに……
人間とはこんなに単純なモノなのだろうか……
消耗していくアンにさらなる不幸が襲う。
「ギャーオ、ギャーオ、ギャーオ」
雪山を覆いつくすハスキーな声……
鳥竜種、ギアノスだ。
雪のような白い体に、たくましく発達した後ろ脚
数は十はいる、大きな群れだ！
このコンディションでは、一匹でも勝てる気がしないのに……
きっと、ティガレックスの鳴き声を聞いて刺激されたのだろうか……
ティガレックスから逃げるための群れと、アンは、運悪く遭遇して
しまったのだ。
アンは自分自身の不幸を呪った。
　そして、戦いのさだめに身をゆだねるが如く、矢を弓につがえた
……
（私ってすごいのかも……）
　初めてのハンターとしての仕事は簡単であったのは間違いない……
依頼内容だけなら、見習いでも出来ることだ……
（簡単な仕事をここまで難しく出来るなんて……すごい才能ね……）
　アンは笑い、そして、矢を放った。

～続く～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5235p/

モンスターハンター Ｒｅ ＷＲＩＴＥ

2010年12月31日06時58分発行